

2023 年度 北九州市立大学 FD 活動報告書



- ✓ FD 研修報告
- ✓ 授業のピアレビュー報告
- ✓ 【特集】

各学部・学群における入門科目（初年次教育）の取り組み

2023 年度 FD 活動報告書

目次

1. はじめに	1
2. FD 研修報告	
(1) 春季新任教員 FD 研修	3
(2) 夏季新任教員 FD 研修	5
(3) 第 1 回 全学 FD 研修「ICT を利用したアクティブラーニングの実施」	8
(4) 第 2 回 全学 FD 研修「大学教育における生成 AI 利用」	10
3. 授業のピアレビュー報告	
(1) 概要	13
(2) 実施状況	13
(3) 各部署の取組状況	14
4. 【2023 年度 特集記事】	
各学部・学群における入門科目（初年次教育）の取り組み	33
5. FD 委員会について	
(1) 活動概要	47
(2) 活動一覧	48
(3) 委員構成	50
(4) 委員会議事録	50

※Web ページ掲載にあたって原本から一部削除した頁があります

第1章

はじめに

はじめに

副学長(教育・FD 担当)

FD 委員会委員長 後藤字生

北九州市立大学では、2023 年度の授業は、昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症対策を実施しながら原則対面としました。5月8日から新型コロナウイルス感染症は 5 類感染症に移行となりましたが、それ以前から、対面で授業を行う方針をとっています。結果的には、対面授業の比率は約 98%という高い水準となりました。卒業単位数における遠隔授業数の比率の制限がある中、対面授業のメリットを前面に出した授業体制を大学として採用しています。

一方で、新型コロナウイルス感染症対策によって加速的に使用されるようになった遠隔授業のメリットも明らかになってきています。学生自身の復習や理解の困難な部分の反復学習を可能にするビデオ教材や ICT を活用したアクティブラーニングなど、有用性が示されてきています。以上のことから、指導的な内容・手法を目指す科目については、審査の上、オンデマンド形式やライブ形式の授業形態を承認しています。このような現状を踏まえ、さらに今後も ICT を利用して、学生により実りある授業を行うため、今年度は 2 つの FD 研修を行いました。

- 1) 2023 年 12 月実施 全学 FD 研修『ICT を利用したアクティブラーニングの実施』
講師は、日高京子先生(基盤教育センター)と藤田慎之輔先生(国際環境工学部)です。それぞれ「大講義科目を振り返る-遠隔授業とMoodle活用」と「MiroやNotionの活用例」のテーマで研修を行ってくれました。本研修の参加者は、全体の約 90%に達し、教員の関心の高さを示していると思われます。
- 2) 2024 年 2 月下旬実施 全学 FD 研修『大学教育における生成 AI 利用』
講師は、森木銀河先生(九州大学インスティテューショナル・リサーチ室 学術推進専門員)にお願いしました。急速に進歩している ChatGPT 等の生成 AI への対応について、メリットとデメリットに関して理解を深めることができました。

上記のような教育の質的改善を図るため、FD 活動のほか、授業評価アンケートを行い、学生から授業に対する意見を聞いて、改善に役立てる活動も継続的に行っています。今年度より、Moodle から新学務システム LCU でアンケートを実施しましたが、自由回答欄や教員のリプライに関して、同時に表示できないなど課題が残っています。今後も、より効率的に授業改善が進むように、教員等からの要望を受け、検討を続けたいと考えています。

また、個だけでなく全体から教育を評価するため、教育改革推進室を軸として、教学 IR 室整備やアセスメントプランの策定を行っています。これらの議論を土台として教育の方向性やカリキュラムの改善等の質的向上をめざすサイクルが出来上がっていますが、教職員の認識がさらに一致するよう、FD 活動を一層深めていく必要があると考えています。

最後に、今年度から、上月翔太先生(愛媛大学)にFDアドバイザーとして、着任していただきました。春と夏の 2 回の新人教員研修を含め、1年にわたり熱心なFD活動へのご協力を賜っていただきました。この場を借りて、御礼申し上げます。

第2章

FD 研修報告

(1) 春季新任教員 FD 研修

■ 日 時：2023 年 4 月 7 日（金） 14:00 ～17:00

■ 場 所：北方キャンパス 本館 C-202

■ 研修テーマ：授業設計の基本－I コマの授業設計

■ 研 修 講 師：上月翔太（FD アドバイザー）

■ 研修のプログラム：

時間	内容
14:00～14:10	オリエンテーション
14:10～15:00	授業設計の基本（講義）
15:00～15:10	休憩
15:10～15:40	90 分の授業計画案の作成（演習・個人ワークと相談）
15:40～16:00	休憩・教室移動
16:00～16:50	模擬授業とピア・レビュー（演習・各教室）
16:50～17:00	まとめと振り返り

■ 参加者数：新任教員 12 名、メンター 9 名、他 5 名（FD 委員、FD アドバイザーを含む）

■ 内容の要約

研修の到達目標は「学習目標に適した授業方法を選択できる」、「学生の学習を促す 90 分の授業の計画を作成できる」「作成した授業計画案にもとづいて模擬授業を実践できる」の 3 点と設定された。研修当日は講義科目に焦点をあてた授業設計の基本についての講義があった。主だった内容は、「アクティブラーニングと講義法」、「導入・展開・まとめ」、「講義法と AI」についてである。その後、90 分間 I コマの授業計画を新任教員が個人ワークとして作成した上で、新任教員とメンターから構成されるグループ（4 人程度）に分かれ、模擬授業、ピア・レビューが行われた。また授業設計や模擬授業に関するグループディスカッションも行われた。

■ 研修結果とコメント

今年度の研修では、例年通り、新任教員の授業開始を目前に、I コマ 90 分の授業設計と実践をテーマに研修を実施し、全ての新任教員が参加した。新任教員研修のプログラムについて、例年、授業における具体的な実践方法が知りたいとの要望やグループディスカッションの量を増やしてほしいとの要望などがあるため、研修では基本的な授業に関する講義は 1 時間程度とし、残る 2 時間は授業実践にあたっての個人ワーク、模擬授業、グループディスカッションの時間に充てた。また新任教員と在籍教員をペアにして、1 グループ当たり 4 人程度のグループ編成とした。新任教員が他分野の授業実践を参考にすることができ、かつ、同分野の熟練教員からのアドバイスを得ることができることが狙いである。

研修後のアンケート回答数は 20 名（新任教員やメンターなど）であった。アンケートによると、すべて肯定的な評価であり、「大変よかった」が 10 名、「よかった」10 名であった。また自由記述においても多くの肯定的なコメントがみられた。

(2) 夏季新任教員 FD 研修

■ 日 時：2023 年 8 月 31 日（木）13:00 ～16:00

■ 場 所：北方キャンパス 本館 D-503

■ 研修テーマ：授業改善と授業設計の基本

■ 研 修 講 師：上月翔太（FD アドバイザー）

■ 研修のプログラム：

時間	内容
13:00～13:10	オリエンテーション
13:10～13:40	I 学期の振り返りと授業改善（講義）
13:40～14:20	I 学期の授業の振り返りと意見交換（演習）
14:20～14:30	休憩
14:30～15:10	授業設計の基本（講義）
15:10～15:30	シラバスのブラッシュアップ（演習）
15:30～15:50	シラバスのブラッシュアップ案の共有（演習）
15:50～16:00	まとめと振り返り

■ 参加者数：新任教員 7 名、メンター 4 名、他 3 名（FD 委員、FD アドバイザーを含む）

■ 内容の要約

研修の到達目標は「I 学期の授業を振り返り、成果と課題を言語化することができる」、「学習目標を起点とした授業設計を行うことができる」、「学生にとって魅力のあるシラバスを書くことができる」の 3 つとした。

事前課題として、I 学期に担当した科目のうち、①授業の概要、②授業の工夫、うまくいった点、③授業設計・運営上の課題、変えようと思っている点、について説明できるようにしておくこととの指示があった。研修当日は、I 学期授業の振り返りにあたってのポイント、授業設計・授業計画、シラバス構成に関する講義があり、事前課題を踏まえ、メンターを加えたグループ別に I 学期に実施した授業の振り返り（授業の工夫、うまくいった点、変えようと思っている点）、授業構成、シラバスの書き方などについて発表が行われ、ディスカッションが行われた。

■ 研修結果とコメント

新任教員研修のプログラムについては、以前より授業における具体的な実践方法が知りたい、グループディスカッションの量を増やしてほしい、との要望が多数寄せられていたため、参加者同士のグループディスカッションの時間を大幅に増やした。上月先生の要望で、講義の後、すぐに参加者の意見交換に移れるように会場を移動可能な机と椅子が配置されている D-503 教室とした。講義と活発なグループディスカッションが実現できたものと思われる。一方で、新任教員から欠席者が続出した。来年度は、事前に参加者の都合を確認するなどの改善方法を検討したい。

研修後のアンケートでは、概ね、肯定的な評価が得られたと思われるが、開催時期や内容について指摘もあった。今後の課題としたい。

(3) 第 I 回 全学 FD 研修

■ 日 時：2023 年 12 月 7 日（木）～2024 年 1 月 19 日（金）

■ 形 式：オンデマンド配信（Stream 配信による視聴）

■ 主 催：FD 委員会

■ テーマ：「ICT を利用したアクティブラーニングの実施」

■ 講師・研修動画

(1) 日高 京子 先生（基盤教育センター）

「大講義科目を振り返る～遠隔授業と Moodle 活用」（約 30 分）

(2) 藤田 慎之輔 先生（国際環境工学部建築デザイン学科）

「Miro や Notion の活用例」（約 30 分）

■ 参加者数：238 名

出席者内訳

学科	出席者
外国語学部	34 名
経済学部	22 名
文学部	31 名
法学部	29 名
地域戦略研究所	6 名
国際教育交流センター	3 名
地域共生教育センター	1 名
情報総合センター	1 名
大学院マネジメント研究科	7 名
基盤教育センター（北方）	24 名
基盤教育センター（ひびきの）	8 名
エネルギー循環化学科	11 名
機械システム工学科	13 名
情報システム工学科	13 名
建築デザイン学科	14 名
環境生命工学科	11 名
環境技術研究所	2 名
その他（学長、特任教員）	8 名

■ 研修の概要

学生のノートパソコン必携化の実現をふまえ、積極的な ICT ツール活用による教育の質的向上が期待される。今回の研修では、「ICT を利用したアクティブラーニングの実施」と題して、Moodle や Miro, Notion といった ICT ツール活用の実践例を紹介し、アクティブラーニング、事前・事後学修などへのさらなる応用を模索した。教員の ICT ツール活用への意識向上が期待される。

■ 実施結果

本研修の参加者数は 238 名であった。コロナ禍を経て、Moodle や Teams などが大学教育活動に積極的にとりいれられるようになったこともあり、本研修に対する関心はたいへん強かったと思われる。アンケート結果を見ると、「非常に参考になった」「参考になった」の割合が8割を超えており、北方・ひびきのを問わず、ICT ツールの活用に積極的な教員が多いことが伺える。本研修には一定の成果があったといえよう。今回は、事前に作成いただいた研修動画をオンデマンド配信し、研修を実施した。講師の先生には負担をおかけしたが、通信障害などによる中断の心配がなく、質の高い研修内容が実現できたと思われる。今後、こうした実施形式の可能性も探っていきたいところである。

(4) 第2回 全学FD研修

■ 日 時：2024年2月28日（水）14：00～15：00

■ 形 式：Teams ライブイベント方式

※後日オンデマンド配信

■ 主 催：FD委員会

■ テーマ：「大学教育における生成AI利用」

■ 講 師：九州大学 インスティテューショナル・リサーチ室 学術推進専門員

森木 銀河 先生

■ プログラム

1	開会のあいさつ	FD委員会 委員長 後藤宇生 先生
2	研修（50分）	森木銀河 先生
3	質疑応答（10分）	2の内容について

■ 参加者数：191名

出席者内訳

学科	出席者
外国語学部	30名
経済学部	21名
文学部	30名
法学部	26名
地域戦略研究所	6名
国際教育交流センター	2名
地域共生教育センター	1名
情報総合センター	1名
大学院マネジメント研究科	7名
基盤教育センター（北方）	27名
基盤教育センター（ひびきの）	7名
エネルギー循環化学科	4名
機械システム工学科	7名
情報システム工学科	4名

建築デザイン学科	6 名
環境生命工学科	4 名
環境技術研究所	1 名
その他（学長、特任教員）	7 名

■ 研修の概要

急速に進歩した ChatGPT 等の生成 AI への対応は、本学の教育活動にとっても喫緊の課題である。本研修は、生成 AI の原理、現状、教育活動における注意事項、有益な利用方法を教員全体で共有することを目的とした。既に、ひびきのキャンパスでは、中武先生による生成 AI に関する研修が実施されていたため、ひびきのキャンパス所属教員は任意参加とし、北方キャンパス所属教員を必修参加とした（本研修は、中武先生研修とあわせて、全学研修として位置づけられる）。研修では、まず、生成 AI の原理から発生する限界や課題について説明がなされ、生成 AI の出力が指示（プロンプト）の質によって左右されることや、事実と異なる可能性（いわゆるハルシネーション）などがわかりやすく説明された。また、さまざまな利用例が具体的に示され、出力を提案として扱うことや試行錯誤を行うことなどの重要性が説明された。

■ 実施結果

Teams ライブイベントを利用した、学外の講師によるリアルタイム配信は、滞りなく円滑に実施された。本研修の参加者数は 191 名であり、関心の強さが伺えた。任意参加であるひびきのキャンパスからも多数の参加があった。研修終了後のアンケートの「今後の教育活動の参考になりましたか」という質問に対しては、「非常に参考になった」「参考になった」とする回答があわせて 8 割以上となっており、一定の意義のある研修となったことが推察される。自由記述欄のコメントでは、より実践的な利用方法を求める意見も見受けられた。引き続き、生成 AI に関する FD 研修の実施を検討したい。

第3章

授業のピアレビュー報告

(1)概要

以下に示す授業のピアレビュー実施状況と報告は、今年度における各部局各学科等で行われたピアレビュー活動の報告である。“授業のピアレビュー”活動は、教員相互の授業公開・参観・授業改善のためのミーティングを含んでいる。

(2)実施状況

部局		実施授業回数
外国語学部	英米学科	6
	中国学科	1
	国際関係学科	2
経済学部	経済学科	14
	経営情報学科	
文学部	比較文化学科	5
	人間関係学科	1
法学部	法律学科	2
	政策科学科	2
地域創生学群	地域創生学類	3
国際環境工学部	エネルギー循環化学科	3
	機械システム工学科	2
	情報システム工学科	10
	建築デザイン学科	4
	環境生命工学科	7
基盤教育センター	教養教育部門	2
	語学教育部門	
	ひびきの分室	2
社会システム研究科		1
法学研究科		2
マネジメント研究科		4
合計		73

(3)各部局の取組状況

2023年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	外国語学部	学科等	英米学科
--------	-----	-------	-----	------

2. 部局の実施方針、方法

各教員が学期に1度、お互いの授業を見学しあう。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	English for core program	1	170	11			
2	留学国際活動2B	1	5	12			
3	Cross-Cultural Field Work	1	15	13			
4	Global Research Project	1	50	14			
5	統語論・形態論	1	94	15			
6	Higher English I	1	17	16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・ The instructor has provided ample time for students to talk with each other in class and tried to create an atmosphere where students feel comfortable expressing their ideas.
- ・ 時間管理が効率的に行われている。多人数の講義でありながら、教員と学生とのコミュニケーションが図られている。

5. 成果と課題

- ・ 他教員の講義を客観的に見て、教員と学生の反応を体験することにより、どのような講義の進め方が効果的であるかの理解向上に大きく役立っている。
- ・ このような大きな成果があるが、目標とする各（全）教員がピアレビューを行うまでには到達していないので、今後、さらに推進する必要がある。

2023年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	外国語学部	学科等	中国学科
--------	-----	-------	-----	------

2. 部局の実施方針、方法

中国学科は教員数が少ないため、ピアレビューは年1回（通常は2学期）実施することとなっている。基本的に、①手を挙げた教員が実施授業を決める；②FD委員をはじめ、学科長及び学科教員が参加する；③FD委員が作成した報告書を学科会議で報告する。
今回は学科教員が授業を提供し、学科長及びFD委員2人が参加した。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	中国語上級総合Ⅱ	2	9	11			
2				12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・授業の組み立て、時間配分などがきちんとなされていたため、間延びした感じがなく、時間いっぱい充実した内容となっていた。
- ・いろいろな解答例を紹介すると同時に、正解、不正解についてかなり詳細な説明をしていた。その中で、特に間違いの分析を行い、文法的な間違い、表現の仕方、気をつけるべき点などを丁寧に説明しているのは大変参考になった。
- ・pptが非常に丁寧に作られており、見やすく、分かりやすかった。
- ・受講生には、「辞書を引くように」と何度も促し、辞書を引くことの大切さを指導していた。
- ・学習用資料、解答例の選択、解説方法から授業の事前準備がしっかりされていることが分かる。

5. 成果と課題

ウォーミングアップの学習内容から事後学習の内容までのすべての学習資料の工夫、授業丁寧にわかりやすく説明する方法、「理解力」と「応用力」を高めるための問題例の工夫など、見習うことが多かった。

2023年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	外国語学部	学科等	国際関係学科
--------	-----	-------	-----	--------

2. 部局の実施方針、方法

- ◆専門科目をレビューの対象と定め、原則として年2回にわたりピアレビューを実施すること。
- ◆講義の質向上に重点を置き、ピアレビューに臨むこと。
- ◆今後、非常勤講師に対しても、ピアレビューへの参加を促す。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	アメリカの社会	2	87	11			
2	東南アジア研究概論	2	110	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ◆学生の興味関心を引くようなアクチュアルな講義テーマの設定、講義主題の適切かつ有効な伝え方、聴講者の集中力を持続させる授業構成、視聴覚教材の有効利用の仕方、学生参加型・学生主体型のアクティブラーニングなど、授業の質向上に向けた多角的な意見・感想が出された。
- ◆学科の全教員がレビューの結果を共有することで、授業担当者（被レビュー者）の講義内容や授業方法に対する知見を把握するとともに、更なるフィードバックを図ることができた。

5. 成果と課題

成果：

- ◆専門科目をレビュー対象に据え、レビューを定例化するという学科の目標を取り合えず達成することができた。
- ◆ピアレビューの実施により、各教員の講義の質向上への関心が高まったと思われる。授業担当者は勿論のこと、レビューアーにとっても自身の授業実践を振り返る場となったと思量する。

課題：

- ◆ピアレビュー参加率が依然として低い。今後のピアレビューではより積極的な参加を促す必要がある。加えて、講義全体を参観することでさらに有意義なピアレビュー活動が期待される。

2023年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	経済学部	学科等	経済学科／経営情報学科
--------	-----	------	-----	-------------

2. 部局の実施方針、方法

各教員に対し、各学期1回以上のピアレビューの実施を依頼している。
 ピアレビューの機会として、3人の新任教員の担当科目講義とベテラン教員の1科目講義をオープン・ピアレビューとして設定している。各科目については、3回分の公開講義を提供している。そのほか、例年どおりに、入門演習プレゼンテーション大会（第1学期）やポスターセッション大会（第2学期）、合同ゼミなどもピアレビューの対象としている。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	入門演習（経済学科）	4	150	11	マーケティングⅡ	4	150
2	入門演習（経営情報学科）	4	150	12	応用戦略分析	3	100
3	ミクロ経済学Ⅱ	5	50	13	合同ゼミ	3	30
4	マクロ経済学入門	6	150	14	Econometrics 194: Error Correction model(I) (他大学)	1	不明
5	経営組織論	1	200	15			
6	オープンキャンパス模擬授業A	2	150	16			
7	オープンキャンパス模擬授業B	2	150	17			
8	経済学特殊講義	2	30	18			
9	未来を創る環境技術（他学部）	1	200	19			
10	ポスターセッション大会	5	300	20			

4. 出された主な意見、コメント

講義系科目においては、Eラーニングの教習方法、大教室で学生を静かにさせる間の取り方、学生との双方向コミュニケーションを取る工夫、アクティブラーニングの学習環境づくりなどについて参考になったとの意見が多く出された。また、オムニバス科目や他学部・他大学の授業の聴講を通して、教員自身の近接領域の学習が得られたとの意見もあった。

演習系科目においては、担当教員が学生の主体性を重視して、それぞれ研究指導にあたっている点が参考になったとの意見が出された。とくに、専門にもとづいた指導とは異なる視点に気づくことが出来たというコメントが多く見られた。

5. 成果と課題

本年度は多くの教員に協力いただき、オープンピアレビューの他にも、オープンキャンパスの模擬授業や他学部の授業見学、合同ゼミなど多岐にわたる形式で実施された。学部全体の授業の質向上に実りのある活動が行えたと考えている。

一方で、ポスターセッションのピアレビューでも指摘されたように、教員間での実施状況に偏りが見られる。学部全体教育の視点から見て、幅広い世代の教員が積極的に参加することが望ましいと考えている。

FD委員として、今後も多くのピアレビューの機会を提供し、より多くの先生方が参加する環境づくりに引き続き努めたいと考えている。

2023年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	文学部	学科等	比較文化学科
--------	-----	-----	-----	--------

2. 部局の実施方針、方法

新任教員の授業を中心に実施している。特別講義等で外部講師を招聘した場合も、FDを兼ねてピアレビュー対象授業としている。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	比較文化入門1	3	168	11			
2	比較文化入門2	3	164	12			
3	比較文化入門2	4	164	13			
4	メディア文化概論・日本の大衆文化・日本の生活文化	3	150	14			
5	日本文学概論	2	76	15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

新任教員に対しては、教材の工夫や学生への発問など授業の技術に関連してコメントが出されることが多く、授業の工夫や教育的効果についてフィードバックするものが多かった。また、比較文化入門1・2の授業に関しては、新任教員に科目のコンセプトが正しく伝わっているか、授業のテーマ設定は適切かなどについてもコメントが出された。

外部講師の講義に関しては、自身の研究課題や興味関心の点からコメントが出されることが多かった。普段は触れることのない分野や課題に触れられる貴重な機会として評価されていた。

5. 成果と課題

新任教員に対するピアレビューは、新任教員が学科の教育方針や授業のコンセプトを理解できているか確認し、フィードバックする貴重な機会として機能している。また、新たに仲間となった教員への励ましの場ともなっているようである。

外部講師へのピアレビューは、講師にフィードバックを行うが、それが学科の授業に直接還元されるものではない。我々教員側が学ぶ所が多く、一種の教員研修として機能している。ピアレビューの目的とは食い違う部分もあるため、研修として実施してもよいのかもしれない。

2023年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	文学部	学科等	人間関係学科
--------	-----	-----	-----	--------

2. 部局の実施方針、方法

今年度は、新任教員がいたため、その先生を対象にピアレビューを実施した。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	人間関係学演習A	4	32	11			
2				12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

授業は1年次必修の授業で、主にレポートの書き方についての指導が丁寧に行われていた。そのため、今後の卒業論文等のレポート作成時に生かされるのではないかと。
 その場で1人1人PCを使用して課題を作成していたため、学生も安心して課題に取り組むことができ、同時に学生の理解度の把握も可能であるため、学習効果が高いと思う。
 書き込みが必要な時は、学生にもわかるように★記入と書かれていたりしたため授業に集中しやすい。配布資料の使い方が非常に参考になった。

5. 成果と課題

ピアレビューの成果については、双方にとって概ね得られたのではないかとと思われる。課題としては、教員の負担にならない程度でどのようにピアレビューを実施するか（頻度や実施時期など）を考える必要があるため、この点を踏まえて来年度に向けて課題解決の方法を検討していきたい。

2023年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	法学部	学科等	法律学科
--------	-----	-----	-----	------

2. 部局の実施方針、方法

法学部は法律学科と政策科学学科の2学科から構成されており、FDのピアレビューにおいても、各学期・各学科から1科目を選定し、FD委員が講義担当教員にピアレビューの実施を打診して実施することを原則として運用してきた。今年度も同様の方針でピアレビューを実施する。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	雇用関係法	2	148	11			
2	民法総則	2	272	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・今、何をみればよいか事前に指摘がされており、かつ、資料等を学生が準備するまでの時間的猶予をとってから、話をはじめている。学生が何をどうしたらよいかが明確である。
- ・きわめて新しい政策動向も紹介し、蓄積された判例の解釈等にとどまらず、現実の社会環境の変化についても言及されていた。
- ・重要な判例等については「ここは特に理解してほしい」というポイントを強調し、メリハリのある授業運営であった。
- ・概念の類型や区分について、「類型化／区分する意味」が例を交えて説明されており、より深い学びにつながっていると感じた。
- ・授業内容を、他科目の内容と関連付けながら、丁寧に説明されていたので参考になった。

5. 成果と課題

法律学科の講義では、その性質上抽象的な概念を取り扱うことが多く、受講生にとってこれを理解することは必ずしも容易ではない。しかしながら、それぞれの講義担当教員は、身近な事例や法改正等の動向を紹介することで、受講生がこれらの概念を理解しやすくなる工夫を凝らしており、ピアレビュー参加教員からも参考になった旨のコメントが寄せられている。

今後の課題としては、科目の性質上限界もあるが、今年度の全学FD研修のテーマでもあった「ICTの利活用」の可能性について、各担当教員を適宜検討していくことが求められよう。

2023年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	法学部	学科等	政策科学科
--------	-----	-----	-----	-------

2. 部局の実施方針、方法

法学部は法律学科と政策科学科の2学科から構成されており、FDのピアレビューにおいても、各学期・各学科から1科目を選定し、FD委員が講義担当教員にピアレビューの実施を打診して実施することを原則として運用してきた。今年度も同様の方針でピアレビューを実施する。

3. 実施授業

N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	N o	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	途上国開発論	3	88	11			
2	政策理論特攻	3	55	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・資料の配付だけではなく、授業内アンケートやワークを提示して、学生の講義参加を促す工夫がされている。
- ・学生にワークを求める際、QRコードを用いるなどしてアクセスしやすいように工夫がされている。また教員の発問も、講義で扱う内容を自身に引きつけて考察ができるよう工夫されている。
- ・教員が自ら撮影した写真なども豊富に用いられており、説得力のある授業となっている。
- ・先行研究を丁寧に追いつつ、背景や原因を探索したの説明が非常にわかりやすい。
- ・専門的な用語の説明や問題点、海外事例についても具体的な例が提示されてイメージしやすい。

5. 成果と課題

政策科学科には、大別して量的研究を専門とする教員と質的研究を専門とする教員がおり、受講生はそれぞれの教員が用いている方法論について、多角的な観点から学びを深めることができるよう各教員が工夫を凝らしている。一方で、それぞれの教員自身は、相互の方法論について触れる機会は少ないため、ピアレビューは教育研究上の貴重な機会となっている。

今後の課題としては、今年度の全学FD研修のテーマでもあった「ICTの利活用」の可能性について、すでに導入している科目もあるが、さらなる効果的な活用方策を各教員が検討していくことが求められよう。

2023年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	地域創生学群	学科等	地域創生学類
--------	-----	--------	-----	--------

2. 部局の実施方針、方法

地域創生学群の専任教員は「地域創生科目」と「地域創生スキル科目」を担当している。また、地域創生演習（ゼミ）でも地域活動をする事となり「地域創生活動科目」が演習ごとに設置されている。これらの科目について、各専任教員が相互にその内容、方法、スキル等を学ぶことによって、より質の高い教育を提供できるように「地域創生科目」、「地域創生スキル科目」「地域創生活動科目」を中心にピアレビューの実施を働きかける。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	指導的実習指導ⅠⅡ	8	121	11			
2	夏期スピリット研修	8	240	12			
3	地域創生実習ⅠⅡ	12	240	13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・地域創生実習を専任教員が指導する形式になっているため、専任教員が実習の詳細を理解できていない点が多くあった。特任の教員を通して指導方法や実習での取り組み、学生の様子を知ることを通じて、理解を深める機会となった。
- ・特任教員と専任教員でコミュニケーションをとることができて、非常に良い機会となった。具体的に学生の様子を知ることができ、ゼミの指導に活かすことができ助かる。
- ・2人の実習担当教員のお話を聞くことができ、普段知らなかった実習の課題や成果について知ることができた。また、意見交換交換の機会は、多角的、専門的な知見から話をする事ができて有意義であった。

5. 成果と課題

地域創生学群の教育において、実習教育は根幹的学びであり、また初年次教育と専門教育の接続は大変重要なものと考えられる。そのため、主に初年次教育をご担当いただいている特任教員と専任教員が情報の共有を図ることが必要不可欠だが、その情報を専任教員が知る機会はまだ多くなかった。地域創生実習指導や地域創生実習など初年時の教育を実施している科目へのピアレビューを進めることや、専任-特任教員間の情報交換の交流の場を設けることにより、相互理解が深まり、学生の具体的な様子や学修状況を踏まえて、学生の指導に活かすことができる機会となった。今回の実施にとどまらず、次年度以降も継続的にこのような場を設けていきたいと考えている。

2023年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	国際環境工学部	学科等	エネルギー循環化学科
--------	-----	---------	-----	------------

2. 部局の実施方針、方法

2年以内に就任された教員のPRを行う

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	化学平衡論	7	50	11			
2	地圏環境学	5	40	12			
3	環境分析化学	5	50	13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

最重点項目について聴講者全員が非常に高い評価を行っていた。
 最重点項目についてごく少数の改善点指摘を除けば、非常に高い評価を得られていた。
 最重点項目についてほとんどの聴講者が非常に高い評価を行っていた。
 1名だけ端なる高い評価を付けるだけではなく、資料、授業中の問題、試験の方法についての疑問をもつ意見が見られた。

5. 成果と課題

新任を含む若い教員にとって有意義なPRとなった。今後もこの内容を基に授業充実に取り組んでいってほしい。

2023年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	国際環境工学科	学科等	機械システム工学科
--------	-----	---------	-----	-----------

2. 部局の実施方針、方法

・第1学期

実験科目、実習科目およびPBL 科目等に非常に力を入れて講義を行っていた金本先生の講義方法・内容に関する最終講義を今後の講義の参考にするために学科全員の先生でピアレビューした。

・第2学期

新任教員がいる場合、通常新任の方の科目をピアレビューしているので、本年度、新任の小田先生の講義をピアレビューした。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	最終講義 6年間の取り組みの振り返り	14	-	11			
2	環境機械特別講義	10	40	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

・第1学期

今回の金本先生の最終講義はこれまでピアレビューで参観したどの授業よりも印象的で勉強になりました。先生の学生教育への情熱と熱心さを感じることができ、見習わなければならないと思いました。また、これこそが本来のピアレビューのあるべき姿ではないかと思いました。本学科の教員だけが聴くのがもったいない講義でしたので、ぜひ学部全体のFD研修会として実施することを提案したいと思います。

・第2学期

学生のプレゼンと評価を重視しており、それは学生の理解度向上に効果的である。また学生とのコミュニケーションやアンケート活用が行き届いており、講義の進行や理解度の把握が適切であった。

5. 成果と課題

第1学期の金本先生はとにかく一所懸命に講義を行っており、特に実験・実習系の科目での工夫は目を見張るものがあつた。それらを学科の教員全員で共有できたのは非常に良かったと思う。今後、各教員が何かしら自分の講義にそれを反映できると良いと思う。

第2学期の小田先生の講義では、ピアレビュー参加者から提出されたレポートを見てみるとほぼ全員から、講義が非常に丁寧でわかりやすかったとの評価であった。また、「毎回の講義でMoodleアンケートを実施し、そのフィードバックを次回講義の冒頭に行う。」というやり方も非常に興味深いやり方と評価されており、総合的に見て、他の参考になる講義であったと考える。

2023年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	国際環境工学部	学科等	情報システム工学科
--------	-----	---------	-----	-----------

2. 部局の実施方針、方法

1 学期と2 学期授業評価の中から、それぞれ高い評価の科目と低い評価の科目それぞれ数科目を選定して公開し、ピアレビューを実施する。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	線形代数学 I	4	83	11			
2	ソフトウェア設計論	3	74	12			
3	論理回路	1	86	13			
4	アルゴリズム入門	1	83	14			
5	電子計測	1	35	15			
6	フーリエ解析	2	89	16			
7	複素関数論	1	95	17			
8	線形システム解析	3	90	18			
9	情報ネットワーク設計	2	51	19			
10	システムモデリング	5	64	20			

4. 出された主な意見、コメント

公開授業において、分かりやすい講義資料の作成を工夫した。
 授業において重要なポイントを繰り返して丁寧に説明した。
 学生の授業内容に対する理解度を確認するために、演習や小テストの時間を設けて実際に手を動かして解かせることや質問して答えてもらう取り組みは、理解の定着と深化に効果的であった。
 スライド資料の他に、アニメーションや図表を導入して説明を補足したり、数式の変換や計算過程を板書で詳しく示したりすることにより、授業内容に対する理解度を深めた。
 集中力を向上するために、簡単な質問をしたり、学生が興味のある話題をコーヒースタンドコーナーを入れる取り組みは効果的であった。
 大人数の講義で教室後方に集中力の低下してしまった学生がいた。

5. 成果と課題

成果：基礎科目(数学)と専門科目にわたって授業公開、ピアレビューを実施したことにより、講義説明資料の構成から、説明形式、視聴機器や板書の活用、演習や小テストの取り組み、授業進行のリズムまで、良い経験を教員間で互いに共有することになった。また、問題点を点検して知恵を出し合って来年度に授業改善するための解決策を探ってみた。
 課題：授業内容に関連する基礎知識、特に背景知識と計算基礎を理解していない履修生のフォローアップ、履修生間理解度のギャップが大きくなった時の対策を講じることは今後の課題。

2023年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	環境国際工学部	学科等	建築デザイン学科
--------	-----	---------	-----	----------

2. 部局の実施方針、方法

本学科のピアレビュー方針は、

「可能な限り授業評価アンケートの高い授業や大学院の授業のピアレビューを行う」

である。なお、概ね以下の方法でピアレビューを実施した。

1) 授業公開する教員（公開教員）は、授業公開を告知するとともに、重点項目設定シートに基づいて重点項目およびその具体的な取り組み内容を決める。

2) 授業を参観する教員（参観教員）は、公開教員が作成した重点項目設定シートに基づいて、公開された授業に対する評価を行う。

3) 公開教員は参観教員の評価に基づいて実施報告書を作成する。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	設計製図Ⅲ	2	54	11			
2	見学ワークショップ演習Ⅰ	2	55	12			
3	環境工学実験	1	53	13			
4	建築材料実験	3	57	14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

出された主な意見は、以下に示すように（一例）、肯定的な意見が多く見られた。

- ・過去の講義内容の復習を盛り込み、学生の理解度に応じた解説が行われていた。
- ・全体講評時に行われるプレゼンテーションに際し、図面と模型を同時に用意し、説明に用いることでより理解の深まる設定提案となっている。
- ・各課題の要所で設定された全体での発表質疑と、毎週行われる教員との1対1での意見交換が有効に働いている。
- ・これまでの作品を年度ごとにMoodleやA3用紙に印刷し、コンテスト結果をあわせて示すことで、学生の良い見本となっており、授業内容の理解度をあげる工夫がされていた。

5. 成果と課題

今年度のピアレビュー参加率（85.7%）は、昨年度（2021年度，92.3%）に比べて、若干低下した。今年度は公開した授業数が昨年度の6科目から4科目に減ったことが理由として考えられる。今後は、高いピアレビュー参加率を維持できるように、各学期において複数回の周知を行うように配慮する。

一方、他の科目と連携させて、学生の理解を深めるための工夫がされているなど、多くの科目において様々な工夫が行われていた。次年度以降、前述のような「高い参加率」や「高評価コメント」を維持していくことが課題として考えられる。

2023年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	国際環境工学科	学科等	環境生命工学科
--------	-----	---------	-----	---------

2. 部局の実施方針、方法

【方針】2025年度のカリキュラム改編を踏まえて、実習科目の点検を中心にピアレビューを実施した。

【方法】卒論着手要件に指定されている1～3年次の実習科目（5科目）と、新任教員担当の座学講義2科目を選定し、数名の教員でピアレビューを実施した。特にピアレビュー教員は、今後のカリキュラム改編時に主力となる若手の准教授をFD委員が指名する形をとり、他分野の実習の状況を研修する機会を設けた。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	環境生命入門実習	2	50	11			
2	有機化学・物理化学実験	2	47	12			
3	環境分析実習	2	48	13			
4	線形代数	3	54	14			
5	生物学実験	1	47	15			
6	工学実験基礎	2	50	16			
7	環境シミュレーション	2	50	17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

【座学科目】

重要な部分は赤字で使い分けており、大変見やすいスライドであった。演習を入れるタイミングも大変効果的であり、また演習中は学生の取り組み状況を見回りながら丁寧な対応がなされており、多くの学生が講義に前向きに取り組んでいた。

【実習科目】

オリジナルのテキストを作成し、実験ごとに分かり易くまとめられていた。教員・EA・TAも積極的にコミュニケーションをとられており、安全面の配慮はもちろんのこと、実験内容の理解を促すような対応がされている印象を受けた。レポート査読における採点基準が客観的に分かるような資料も配付しており、成績評価を不安に思う学生にとっては極めて親切な対応と思われる。

5. 成果と課題

・新任教員の担当科目については、座学、演習ともに学生の教育効果が最大限に引き出せるように、授業の構成、進め方、学生の理解度への配慮など、様々な観点からの工夫が見られた。これは参観した教員にとって良い研修の機会となった。

・実習科目については、どの学年の実習についても教員とEA、TAが連携して、安全に配慮した教育効果の高い実習が運営されていることが改めて確認できた。本ピアレビューの成果を2025年度のカリキュラム改編に反映させて、より良い教育プログラムの策定に活用したい。

・2024年1月のFD部会で、ピアレビューの本来の目的は「新任教員の講義に関するピアレビュー」であることを他学科が主張し、部会長もこれを認めた。しかし新任教員が1学期、2学期ともに講義を担当するわけではないため、年間を通したピアレビューの報告ができない可能性がある。本学科も来年度は新任教員の講義のみをピアレビューすることが予定されているが、学部の取りまとめ方としてこれで良いのかが課題である。

2023年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	基盤教育センター	学科等	
--------	-----	----------	-----	--

2. 部局の実施方針、方法

実施方針

積極的にピアレビューを推奨している。他教員のアクティブラーニング等の取り組みや授業外学習の実施方法などを参考にする。

実施方法

各教員が任意に連絡を取りながらピアレビューを行っている。相互に情報提供と意見交換を行うことで、教育力向上に努める。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	アカデミック・スキルズI	1	26	11			
2	アカデミック・スキルズI	1	40	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

・本講義で提出予定のレポート課題のテーマについて深掘りさせていくための思考法などを学習させていた。特にテーマから連想されるキーワードを挙げ、それぞれのワードからさらに細部まで関係する項目を広げるという手法がとられた。学生も他の参加者から意見をもらうことで、自分とは異なる視点を得られたのではと思われる。

・漠然とした、あるいは、素朴な疑問を、具体的・建設的な「問い」へ深化させる思考プロセスについて、身近な事例から分かりやすく解説していた。

5. 成果と課題

アカデミック・スキルズではピアレビューの候補日のすり合わせをするなど取り組みを行ったが、昨年度に比べて提出が悪かった。ピアレビューを定期的に行えるシステム作りに力を入れたい。

2023年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	基盤教育センター ひびきの分室	学科等	
--------	-----	--------------------	-----	--

2. 部局の実施方針、方法

実施方針

積極的にピアレビューを行い、他教員のアクティブラーニング等の取り組みや授業外学習の実施方法などを参考にしている。

実施方法

授業公開日をひびきの分室教員で共有し、教員が任意に連絡を取りながらピアレビューを行っている。相互に情報提供と意見交換を行うことで、教育力向上に努める。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	国際経済研究	1	20	11			
2	日本事情	3	6	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・アクティブラーニングを積極的に取り入れた授業の見学が行われた。アクティブラーニングといっても、授業によって実施する内容は異なるので、相互に見学し学び合うことが重要だ。
- ・受講生発表の回が授業見学が重なっていた授業があった。その回は、受講生にとっても、担当教員以外に学習の成果を披露する貴重な機会となっていた。これを発展させ、単に見学するだけでなく、積極的に参観する形式にすることも、今後のピアレビュー活動において有効である可能性が見出された。

5. 成果と課題

次年度以降も教員相互でピアレビューを行い、他教員の指導方法を参考にして教育力の向上に努める。

2023年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	社会システム研究科	学科等	
--------	-----	-----------	-----	--

2. 部局の実施方針、方法

(1) 方針：「社会システム総合概論」をピアレビュー科目として設定する。
 本科目は、「東アジア」「文化言語」「地域コミュニティ」「現代経済」専攻の教員（各1名）によるアクティブラーニング形式の授業である。科目の目的は、専門領域にのみ関心が向きがちな大学院生に各専攻の枠を超えた複合領域的な視点と発想を持たせることにある。その実践を改善するとともに、同様の視点を指導教員も確認する。

(2) 方法：院生が本科目の実施形式に慣れた段階（1学期後半）で各専攻からの教員によって実施する。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	社会システム総合概論	6	12	11			
2				12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・担当教員は厳しいことを仰る一方で、ほめるところはほめておられた。また常に全体を見られていた。自分自身の研究指導に取り入れようと思った。
- ・異なる専攻の学生が、自分の専門分野の知見を活かして報告に対する質問やコメントを行なうなど、様々な専攻の学生が一堂に会して多角的に論じ合う、という同科目の目的が果たせていると感じた。
- ・受講者の研究内容が多岐にわたる中、それぞれが自身の関心を追究しつつ、授業を通じて受講者間に研究の充実に結びつく研究環境が醸造されるよう、授業担当者の方々が工夫されてきたことがうかがえました。

5. 成果と課題

(1) 成果：「学生が互いがどんな研究をしているのかを知らない」「1年生の最初の学期は指導教員がいない」などの意見をふまえて、受講生各自の研究状況の報告を本共通科目で行っている。今年度はピアレビューの回数を増やし、発表学生のスケジュールを事前に教員に知らせることで参加者数、ピアレビュー数が増え、FDとしての効果も期待できる成果が得られた。

(2) 課題：意見交換が活発になるよう「他の学生の報告を聞く大学院生達にも、こうした機会にどのような方法で、適切な問いや建設的な意見を出すことができるか、その点についてもぜひ学んでもらいたい」という意見があった。

2023年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	法学研究科	学科等	
--------	-----	-------	-----	--

2. 部局の実施方針、方法

大学院法学研究科では、2017（平成29）年度以降ピアレビューを実施している。在籍している大学院生の人数が少なく、ピアレビューに不向きな修士論文等の執筆を直接的に指導する科目も多いこともあり、複数の科目においてピアレビューを実施することは困難である。このような現状を踏まえ、法学研究科では、少なくとも各学期1科目はピアレビューを実施することとしている。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	法政総合演習	2	3	11			
2	憲法AIV	2	2	12			
3				13			
4				14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・履修生の研究内容について尋ねた上で、当該研究と講義内容との位置づけについて示唆しており、興味・関心に即した教授となる工夫がされている。
- ・概要説明でありながら、イメージしやすい端的な表現を用いて説明をし、説明内容の対極に位置づけられる内容の説明をするなどして、対比がしやすい、あるいは、区分が明確になるような説明や教示を行っており、全体像と個々の区分を把握しやすい。
- ・親しみやすい雰囲気を作り、受講生の興味に対応する話題を提供するなどして、学習意欲を保持している。また、視野が狭くなりがちな事項を指摘して、バランスのとれた学習となるように工夫がされている。

5. 成果と課題

法学研究科には、大学院における専門的な知見を少人数の授業で提供している。このことは、教員と受講生が議論を重ねることが可能となっており、受講生の問題関心に即した授業を展開することをおして、受講生の理解の向上に大きく貢献している。

一方で、ピアレビューの実施という観点では、少人数の授業にピアレビュー参加教員が出席することは、受講生にとって心理的負担を与えている可能性も少なくないと思われる。この点については、法学研究科におけるピアレビュー実施のあり方として検討の余地があるように思われる。

2023年度 ピアレビュー報告書

1. 部 局	学部等	マネジメント研究科	学科等	マネジメント専攻
--------	-----	-----------	-----	----------

2. 部局の実施方針、方法

- ・基本的にどの講義も教員がお互いに自由に聴講できるという了解のもとで運営している。ただしマナーとしては、事前に担当教員に連絡することを申し合わせている。
- ・今年度のピアレビューは、FD委員2人が新任教員の担当講義を対象に実施した。
- ・ピアレビューの結果は研究科内で共有され、教育内容・方法の改善を図ることとしている。
- ・また、平成26年度からは、本ピアレビュー結果を授業アンケート結果とともに対象となった講義担当教員に送付することとしている。

3. 実施授業

No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)	No	授 業 名	参加教員 (人)	学生数 (人)
1	地域産業と事業創造	2	17	11			
2	モノづくり競争力の強化	2	4	12			
3	医療マネジメント	2	7	13			
4	サプライチェーン・マネジメント	2	3	14			
5				15			
6				16			
7				17			
8				18			
9				19			
10				20			

4. 出された主な意見、コメント

- ・前回のワークの結果をレジメで共有し、振り返りをすることは学習定着に有効と感じた。
- ・実務経験に基づいたお話は、学生の理解・応用につながると感じた。
- ・議論（論点）を整理しながら、理解や議論を深めようとする点は他の教員にも参考になる。
- ・質問に対しても、適宜対応していた。
- ・学生の関心（レポート）をベースに議論しブラッシュアップして、最終レポートとして昇華させていくことは、学びの定着などにとって有効と感じた。
- ・講義においてはやや一方向的であったので、もう少し学生への呼びかけ等を増やし、双方向性を意識するとより良くなるように感じる。

5. 成果と課題

- ・今年度の新任教員は全員が実務家教員であったため、ご自身の経験に基づいた討議や解説などがされていた。
- ・すべての授業で非常に丁寧な講義資料作りがされていた。複数の授業で実施されていた、前回の講義の振り返りも、復習と橋渡しを兼ねて非常に有効であると感じた。
- ・講義によって、教員と学生との双方向性にばらつきがあった。一対一の問答とともに、全員を巻き込んだ議論の場を作れるとさらに良くなると感じた。
- ・2学期担当の新任教員の1学期授業参観は今年度実施していないが、昨年度に有効性を示されたことから今後は継続実施していきたい。

第4章

2023 年度 特集記事

EDUCATION



特集

各学部・学群における

入門科目（初年次教育）の取り組み

取材・編集：2023 年度 FD 委員会・FD 活動広報ワーキンググループ

胡玉華（外）、渡瀬淳子（文）、市原勇一（経）、寺田千栄子（地創）、高木駿（基盤）、池田隆介（基盤ひびきの）



協働学習を取り入れた実践

橋本愛 准教授（外国語学部中国学科）

担当「中国語初級総合Ⅰ・Ⅱ」 履修者：1年生18名

取材日：2024年1月12日（金）

取材担当：胡玉華

どんな授業ですか？

この授業は中国学科1年次の必修の授業で、週4回行われます（日本人教員2回、中国人教員2回）。大学入学後に初めて中国語を学ぶ学生が大部分のため、発音の仕方から学んでいきます。授業を通じて中国語に関心を持ってもらうだけでなく、ことばがもつ面白さを再発見することも目的としています。



中国学科におけるこの授業の位置づけ

話す・聞く・読む・書くという4技能を総合的に高め、中国語コミュニケーション能力を育むことを目的としています。学習事項を存分に活用し、教員やクラスメイトと中国語でコミュニケーションを取ることで、外国語でコミュニケーションできる楽しさも味わってみたいと思っています。教科書で話題になったテーマについて、ペアワーク、グループワークを通じて協働学習に取り組むこともしばしばです。

授業においてどのような難しさがありますか？

大部分の学生が大学入学後に中国語の学習を始めるものの、語学に興味がある学生がほとんどのため、みんな楽しそうに授業を受けています。ただ、中には人前で話すことが苦手な学生さんや、初対面の人とコミュニケーションを取るのが苦手な学生さんもいるので、どのように働きかけるのが良いのか、いつも考えています。また、会話やパフォーマンス課題は得意だけれど、単語を覚えたり小テストなどの筆記が苦手な学生さんもいるので、苦手部分を補いながら、4技能を総合的に高める工夫が必要だと感じています。

難しさを克服するためにどのような工夫を行っていますか？

学習内容が多いため（単語や文法事項が多く出てくるため）、様子を見ながら、無理のない進度で進めるよう心がけています。また、できるだけ質問しやすい雰囲気を作るよう心がけています（クラスメイト同士で学習を確認し合えるよう、練習・復習の時間なども設けるようにしています。）

得られたFDに関する知見について

1年生が履修する「中国語初級総合Ⅰ・Ⅱ」には、3つの少人数のクラスがあります。そのうち1クラスを担当されている橋本先生の実践は、他のクラスの担当者にとって、大いに学ぶ価値があります。その中でも、「協働学習」を取り入れた実践は最も推奨すべき取り組みです。例えば、①コミュニケーション能力を育むために、教師による一方的な講義だけではなく、学習者同士のペアワークやグループワークなども積極的に取り入れていることや、②発言や質問をしやすいクラス環境を作るために、教師目線からの評価だけではなく、学習者同士で学習成果を確認し合えるようにするなどの工夫は、アクティブラーニングの一環として欠かせない要素でもあります。

専門の学びへの入り口

寺田由美 教授（文学部比較文化学科）

担当「比較文化入門Ⅰ・Ⅱ」 履修者：1年生約150名、2年生以上、若干名

取材日：2024年1月17日（水）

取材担当：渡瀬淳子

どんな授業ですか？

比較文化入門は1学期に実施する比較文化入門Ⅰと、2学期実施の比較文化入門Ⅱがあります。この2つはともに、大教室での講義と10人前後に分かれて受講するクラスセミナーを組み合わせて授業が行われます。

授業が講義と演習に分かれているんですね。それぞれどのようなことを学ぶのですか？

講義では、文化資源（1学期）と文化共生（2学期）をキーワードに、学科教員がそれぞれ自分の専門に基づいて、比較文化学科で何をどのように学ぶのか、また学ぶことで何を身につけることができるのかを語ります。

クラスセミナーでは、レポートの書き方や文献検索の方法などを徹底的に教えるとともに、1年生が大学生活にスムーズに適應できるよう支援しています。特にレポート指導には力を入れています。10名前後の少人数クラスのレポートを、担当教員が丁寧に添削してフィードバックします。1学期には2回レポートを書く機会があるので、1回目で受けた指導を2回目に活かすことができます。

また比較文化入門Ⅱのクラスセミナーでは、受講生全員がクラスセミナーでプレゼンテーションを行います。伝わる発表にするためのコツや、プレゼンテーションを聞く態度についても指導を行います。

比較文化学科におけるこの授業の位置づけはどのようなものでしょうか？

この授業は、新入生全員を対象とした必修科目です。2年生から本格的に始まる専門科目の受講を前に、学科で何を学ぶのか、学びから何を修得するのか、自分が特にどの分野に興味があるのかを知ってもらうことが目的です。

また、比較文化学科では卒業論文が必修です。レポートを課す科目も多く、3年生になるとゼミなどでの発表が増えるので、1年生の早い時期からレポートの作成や文献検索の方法、プレゼンテーションの準備方法など、学科の学びに必要なスキルを身につけることで、ゼミや卒業論文作成に備えてもらうこともこの授業の狙いです。

授業においてはどのような難しさがありますか？

多様な学問領域の教員が、それぞれの専門分野に基づいて講義を行うため、講義に一貫性を持たせるための工夫が必要です。

また、教員の専門分野に関してあまり知識を持っていない学生も多いので、理解できているかどうか不安になることもあります。さらに比較文化学科での学びは、人文科学系に多い、いわゆる「今日学んで明日すぐに役立つ」ものではないので、学びの意義をいかにして伝えるかを考える必要があります。

難しさを克服するためにどのような工夫を行っていますか？

オムニバス形式の講義に一貫性を持たせるために、数年前から「文化資源」、「文化共生」というキーワードを導入しています。これらは比較文化学科の学びを構成する2本柱になっているので、1年を通して学ぶことで、「文化」というものをどう捉えるかという学びの基礎を作ります。先生方には、多様な価値観や文化的背景の理解を促すような

授業を心がけてもらっています。

また、それぞれの教員の話は独立したものですが、類似するカテゴリやテーマもあります。テーマが重なってもあえてそれを講義してもらうことで、学習者が個々の授業を有機的に結びつけ、違った角度から同じ物事を見る経験ができるようにもしています。

専門的な話を初学者に聞かせるのは大変ではないですか？

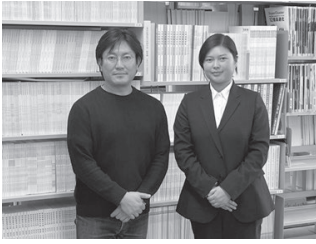
比較文化入門Ⅰでは文化資源、比較文化入門Ⅱでは文化共生を軸に、各教員が授業を構築しています。また、初学者にも授業を理解し興味を持ってもらうために、極力テクニカルタームの使用を避け、フィルムやテレビコマーシャル、絵画や写真、浪花節やポップスといった視覚資料、音声資料を利用するなど、各教員で工夫しています。学びの意義の伝授に関しては、私個人としては、過去のことを語るときでも、常に現在進行中の出来事と絡めて話すように努めています。

得られた FD に関する知見について

寺田先生のお話から、学科共通のキーワードを設定していなかった頃に比べると、それらを設定したことで、講義に一貫性が出てきたように思います。比較文化入門は、新任教員のピアレビューが積極的に行われる授業になっていて、授業のコンセプトを共有したり、授業の内容や方法についてフィードバックしたりと、学生だけでなく、教員にとっても貴重な学びの場となっています。このような工夫が学生の学びを支えているのではないかと思います。

また、大教室での講義に少人数授業を組み合わせることで、クラスセミナーで講義の評価を聞くことができ、それが次年度の大教室での授業改善につながっています。さらにクラスセミナーの担当者は、3年次のゼミ配属まではクラス担任の役割をつとめることになり、きめ細かい学生支援を可能にしている点でも、有意義な授業であると感じました。





経済社会への興味関心を喚起する

畔津憲司 准教授（経済学部経済学科）、唐麗 准教授（経済学部経済学科）

担当「マクロ経済学入門」履修者：1年生約300名（必修科目）

取材日：2024年1月12日（金）

取材担当：市原勇一

どんな授業ですか？

マクロ経済学は経済を巨視的に捉えてそのメカニズムを考察する経済学の一分野です。例えば、景気循環や経済成長、失業、インフレ（デフレ）といった現象がマクロ経済学の主要な研究対象となっています。この授業では、マクロ経済学を学ぶうえで不可欠な基礎知識を提供することで現実のマクロ経済の動向に関する興味を喚起し、加えて上位科目であるマクロ経済学Ⅰ・Ⅱの講義内容を理解するための基礎的な素養の習得を目指しています。

経済学科におけるこの授業の位置づけ

マクロ経済学入門は経済学科、経営情報学科の両学科において1年次必修科目に位置づけられています。直接的な上位科目はマクロ経済学Ⅰ・Ⅱとなりますが、財政学や金融論、労働経済学といったさまざまな専門科目の基礎となる重要な科目です。また、マクロ経済学入門で学習する基礎的な概念（例えば、GDPなど）は経営学や会計学といった科目を理解するうえでも必要とされる概念ですので、経営情報学科においても1年次必修科目となっています。

経済学ではさまざまな理論を学ぶわけですが、以上のような位置づけから、この授業では理論は必要最低限とし、基礎的な概念を説明し、経済社会への興味関心を引き起こすことを重視しています。

授業においてどのような難しさがありますか？

経済学は積み上げ型の教育カリキュラムになっているので、基礎的な概念や理論が身についていないと上位科目の理解もおぼつかなくなってしまうです。この授業は必修科目ですから、全員にきちんと理解してもらうという点に変さがあります。

また、同一科目を複数の教員で担当していますので、授業の進度や受講生の理解度、成績評価が大きくずれないように気をつけています。

難しさを克服するためにどのような工夫を行っていますか？

まず、受講生にはこの授業の重要性や単位を落とした場合のリスク、必要な勉強時間を伝えるようにしています。また、受講生の理解を確実にするために授業内容の確認テストや課題を細かく設定し、理解度が十分でなかった場合には追加で解説を行うようにしています（追加の解説が必要となる場合を想定して、授業スケジュールにも余裕を設けています）。

複数教員で担当することの難しさですが、教科書、課題、テストを共通化することにより克服を図っています。また、定期的に打合せを行ったり、課題提出者数や理解度のデータを共有したりすることで授業の進度や成績評価が大きくずれを防いでいます。以前は打合せを対面で行い、確認テストや課題も紙で行っていましたが、TeamsやFormsが活用できるようになり、打合せやデータ共有も効率的に行えるようになりました。

得られたFDに関する知見について

授業の位置づけを意識した教科書の選定や授業設計をされており、とても参考になりました。確認テストや課題を細かく設定し、理解度を確認して必要があれば追加の解説を行うといった取り組みは、複数教員で担当する科目でなくとも参考にできると思いました。





「まずはやってみる」を授業で実現する

西田心平 教授（地域創生学群地域創生学類）

担当「指導的実習Ⅰ・Ⅱ」 履修者：Ⅰ年生 124 名

取材日：2024 年 1 月 29 日（月）

取材担当：寺田千栄子

どんな授業ですか？

指導的実習Ⅰ・Ⅱは、地域創生学群のⅠ年生が必修で受講する、地域創生学群の学びの基礎が詰まった入門科目です。地域創生学群では、地域での実践活動を行う「実習」を教育の柱の 1 つとしており、4 年間を通じて地域に対して深くコミットしていきます。また、地域の視点を重視して、地域課題の解決に必要な知識の習得を行っていきます。

特に、初年次にはこの活動に必要な能力（例えば、他者への理解を深める、地域課題を知る、仮説を設定する、検証するための方法を知る、アウトプットの方法を知る、地域の方とのコミュニケーションを学ぶ）を体感的に学んでいくことを重視しています。これらを学ぶ方法として特徴的なのは、地域のアドバイザーのお力添えを頂きながら実際に FM 番組を作成し放送することです。学生たちが少人数でグループを構成し、課題の設定、必要な取材、収集情報の分析、リスナーに届く表現方法の工夫、チームマネジメントなど多様な視点から番組を作成していきます。地域の方を含めた多様な他者と一緒に FM 番組を作り上げるというプロセス、実際にラジオを発信する体験は唯一無二の学びとなります。

地域創生学群におけるこの授業の位置づけ

この授業は、地域活動や地域創生学群での学びの基礎を身につけることを目的とした入門科目です。特に初年次の学生の視野を広げ、多様性理解を図る場にもなっています。

授業は、地域創生に必要なマインドを身につけるために専任教員がオムニバスで行う研修的要素と FM 番組の制作を通した実践的要素から構成され、円環的に学びを深めていきます。

授業においてどのような難しさがありますか？

この授業は学生が主体的に取り組む学ぶことに意義があります。しかし、コロナ禍の影響などコミュニケーションを積み重ねる機会を逸した学生へどのようにマインドセットを行うか、また、科目全体を通じて高度な能力が求められるため、初年次の入門科目として目標設定にも難しさがあります。

また、研修要素を専任教員がオムニバス形式で実施すること、実践要素を特任教員が担当すること、FM 番組の作成においては外部のパーソナリティが参加することなどカウンターパートが多く、その連携や役割分担などに特有の難しさがあります。

難しさを克服するためにどのような工夫を行っていますか？

難しさを克服するために、3 つの工夫を紹介します。1 つ目は学生へのサポート体制の充実です。実践的内容では、特任教員、SA それぞれ 4 名によるサポート体制を構築しています。2 つ目は、学生の実践的学びの進行に応じた、研修的要素の学びの場の提供です。例えば、グループ活動が始まる段階でチームマネジメント的内容の講義を実施するなど、段階に応じた学びを提供する工夫を行っています。最後に、関わる教職員、カウンターパートとの意識統一で



複数の教員が参加する定期的な FD の場を

アカデミック・スキルズⅠ担当教員（基盤教育センター）

担当「アカデミック・スキルズⅠ」履修者：北方キャンパスⅠ年生全員

取材日：2024 年 1 月 22 日（月）

取材担当：高木駿

どんな授業ですか？

「アカデミック・スキルズⅠ」は、基盤教育センターが北方キャンパスⅠ年生全員を対象に提供している必修科目の 1 つです。本授業は、大学生活に必要な「考える力」の基礎となるスキルを身につけてもらうことを目的にしています。社会問題が多様化する現代社会においては唯一の正解がない課題に出会う場合があり、そうした正解のない課題について考えていく姿勢が大切になります。「考える力」の習得こそが、複雑で結果が予想しがたい現代社会を生き抜く基礎を作り上げるはずで、そのために、本授業では、さまざまなテーマを題材としてアクティブラーニングを取り入れながら、「情報技術を活用し、自分の考えを表現できること」、「正解のない課題の解決に向けて、諦めることなく考え抜くことができること」に関わる能力の習得を目指しています。

具体的に言えば、情報リテラシーに関する授業回では、情報リテラシーの基礎や、学内ネット環境を利用する技術、あるいは、マイクロソフトの各種アプリケーションを実際に使える技術の習得を目指し、考える力に関する授業回では、「受け取る力」、「処理する力」、「発信する力」の習得を目指し、各教員独自の設計のもとでさまざまな課題を行います。いずれの回もアクティブラーニングの形式を持ちます。

本授業の特色は、高校生だったⅠ年生が大学で必要なスキルを習得していくなかで、高校生との違い、つまり「自分の頭で考えなくてはならないということ」を自覚してもらう点にあります。また、クラスによって学びの差が出ないように共通性を担保しつつも、各クラスを異なる教員が担当している点も本授業の特色です。

この授業の位置づけ

既述の通り、「アカデミック・スキルズⅠ」はⅠ年生の必修科目として位置づけられています。基盤教育センターは、現代社会が生み出す諸課題を解決しながら、自ら考え判断して生き抜くことができる基盤となる能力、つまり「基盤力」を伸ばす教育（「基盤教育」）を、とりわけⅠ、Ⅱ年生に提供しています。「基盤力」は、本学の 3 つのビジョン「地域」「環境」「世界（地球）」を含む、「地域とともに歩む力」、「環境を育む力」、「世界で活躍する力」、「知的スキルを活用する力」、「適切に判断する力」、「相互に理解しあう力」、「自己を確立する力」という 7 つに細分化され、それらの力に応じるかたちで、「基盤教育」は、「地域科目群」、「環境科目群」、「世界（地球）科目群」、「知の技法科目群」、「知の創造科目群」、「共生と協働科目群」、「ライフ・デザイン科目群」という 7 つの科目領域から構成されます。そのなかで、「アカデミック・スキルズⅠ」は「知の技法科目群」に属しています。この科目群には、「情報社会への招待」や「法への誘い」、「データ分析」などがあり、「アカデミック・スキルズⅠ」は、それらの基礎となる科目として位置づけられてもいます。

こうした区分上の位置づけ以外にも、「アカデミック・スキルズⅠ」は、大学生としての最初の学び、つまり高校とは違う学びのスキルを身につけてもらうことを目的としている点で、基盤教育センターが提供する他の科目、そして各学科が提供する科目全体に対しても、大学生としての基礎を提供する科目としてのトポスを持つと考えられます。

授業においてどのような難しさがありますか？

「アカデミック・スキルズⅠ」には大きく2つの難しさがあります。

1つ目は、担当する教員が各クラスで異なるので、DPの達成に向けてクラスごとの差が生まれないように調整する難しさです。

2つ目は、学科を横断したクラスを同一教員が複数受け持つ場合があるので、それぞれの学科の特色に応じた対応をする難しさです。

これらの難しさは、一定の共通性を保ちつつも、それぞれの学科クラスに合った授業を展開するという、普遍と特殊の両立という難しさとして総括できるのではないかと思います。

難しさを克服するためにどのような工夫を行っていますか？

これらの難しさを克服するために、基盤教育センターは組織的にいくつかの工夫や対策を行っています。

まずは、「アカデミック・スキルズⅠ」に共通した教材の利用です。特に情報リテラシーに関する授業回では、情報リテラシー、学内ネット環境、あるいは、マイクロソフトの各種アプリケーションについては、各種マニュアルや説明動画、Moodleの各回ツールを作成することで、教員個人に縛られずに、一定水準以上の内容を担保した授業を提供できるようになっています。

つぎに、「アカデミック・スキルズⅠ」に共通した複数の習得目標の設定です。とりわけ考える力に関する授業回では、「受け取る力」、「処理する力」、「発信する力」という習得目標を設定し、各教員がそれを指標にしつつも、それぞれの授業設計を考えています。これにより、教員個人のオリジナリティを授業設計に活かしながら、クラスごとに差が生じない授業を提供できるようになっています。

そして、最大の工夫は、担当する教員全員（6～7人）が参加するアカデミック・スキルズのFD会議を月に1回程度定期的に開催している点です。授業が開始される以前には、その年の「アカデミック・スキルズⅠ」全体を概観し、前年度の授業との比較から修正点、改善点を検討し、教材を改良し、授業に備えます。また、授業が開始された後には、各クラスで発生した問題や、教材や授業内容の問題点を共有し、改善策を検討し、授業に活かします。この際に、同じ学科を担当している教員との意見を交換したり、そのクラスの問題点を共有したりして、各学科の特色に個別に対応することが可能になっています。そして、授業が終了した後には、その年の反省や振り返りをやはりみなで行い、次年度に向けた修正点を明らかにします。

得られたFDに関する知見について

授業に関連するFDは基本的に、1つの授業を改善する目的というよりも、授業で得られた知見を共有したり、生じた問題への対策を共有したりする点に力点がある。しかし、今回のように、1つの授業を改善していくために、複数の教員が定期的に集まり、その授業についての意見を交換するというやり方も重要であるように思われる。これは、授業の設計や内容を改善するだけでなく、教員間の連携をスムーズにし、他人の授業に対して的確なアドバイスを行う力を醸成してくれると考えられる。



初年次教育における課題抽出のための科目横断的調査

植田正暢 教授（基盤教育センターひびきの分室）、中岡深雪 教授（基盤教育センターひびきの分室）

担当「英語 II」履修者：1 年生 45 名、過年度生 8 名、「経済入門 I」履修者：1 年生 273 名、2 年生 62 名他

取材日：2024 年 1 月 17 日（水）

取材担当：池田隆介

初年次教育における諸課題への対応を考えていく際、単一科目内での創意工夫では解決し得ない問題にも直面することになります。基盤教育センターひびきの分室では、2022 年度にひびきのキャンパスにおける初年次教育の在り方を検討するため、どのような課題があるかを科目横断的な調査を行いました。この調査から得られたことや授業に反映したこと、さらには、今後の課題について、調査を主導した 2 名の先生にお話を伺いました。

どんな授業ですか？／国際環境工学部におけるこの授業の位置づけ

取材担当：「初年次教育」に関係する授業として、先生方が関わっていらっしゃる科目は何ですか。

植田：学部 1 年生向けの授業を挙げると、「英語 II」「実践英語」などの外国語教育科目を担当しています。

中岡：私は、「経済入門 I・II」「キャリア・プランニング」などの教養教育科目を担当しています。

植田：国際環境工学部の教育課程は、専門教育科目と基盤教育科目から成り立っています。基盤教育科目は外国語教育科目、教養教育科目から構成されています。この基盤教育科目は基盤教育センターから提供されており、特に、ひびきのキャンパスにおける基盤教育科目を推進する役割を担うのが基盤教育センターひびきの分室です。

中岡：国際環境工学部生は、学部 1 年生から多くの基盤教育科目を履修しています。そのため、基盤教育センターひびきの分室の教員は、それぞれの担当科目が初年次教育に資するものとなっているかどうかを常に考えていかなければなりません。

授業においてどのような難しさがありますか？

取材担当：初年次教育と授業の関係でどのような問題、困難があったのでしょうか。

植田：2025 年から新カリキュラムが導入されますが、その前提となる現状分析をしっかりと行っておかなければならない状況でした。初年次教育の在り方について考えることもその一つです。

中岡：教養教育科目の展望を話し合う中でも、初年次教育に関する様々な問題を挙げていきました。その中に、「ある科目で学んだはずのことが別の科目で生かされていない」との指摘がありました。望ましい基盤教育、あるいは、初年次教育の実現は、特定の授業に依存して成立するものではありません。科目間の繋がりを連携を考える必要があります。

植田：基盤教育センターひびきの分室としては、現新しいカリキュラムにおいても、初年次教育については、それ専用の授業で完結させるのではなく、様々な科目で繰り返しながら学んでいくというマイクロインサ

ーションで展開していくという方針で編成することとなりました。そこで、初年次教育の実情を把握するにしても、科目ごとに課題をあげてだけでなく、科目横断的に調べてみる必要が出てきたのです。そこで、初年次教育が関係する複数の授業の担当者、受講生を対象に調査を行うにしました。

調査から得られた知見

取材担当：そこで、2022年にアンケート調査が行われたのですね。調査対象は、基盤教育センターひびきの分室教員担当科目の教員、その科目の受講生とのことです。この調査の狙いは何ですか。

植田：2つあります。「基盤教育科目全体を通して学生が網羅的に学習スキルを習得し、応用できる機会を提供できているか」と「学生は大学の学びに必要な学習スキルを習得し、応用できる機会を提供できているのか」ということです。

取材担当：調査により分かったことの中で、印象的だったことを教えてください。

植田：例えば、「論理的思考・アウトプット」に関する能力は、多くの授業において力点を置いた指導がなされているということが分かりました。そのせいか、学生の調査結果を見ると、学年を追うごとに技能を身につけているとの実感があるという結果が得られました。これは、教育の成果が表れたと捉えることができます。しかし、アンケート項目をさらに細かく見てみると、プレゼンのスキルについては、2年生よりも3年生のほうが理解できているという実感が落ちていることが分かりました。理想とすれば、学年とともに実力を上げていってほしいところですが、初年次教育から先に進んだ段階で壁にぶつかることで「実力を実感」させられることもあるのではないかと推測できます。

中岡：「読解」に関わる結果も印象的です。教員側の意識を見ると、多くの科目で読解に関する何らかの指導を取り入れています。一方、学生の意識を見ると、学年が上がるにつれて、理解の実感が若干であるものの下降する傾向が見られました。これは、上の学年ほど専門性が高い文献を読まなければならないので、困難を感じたことが要因ではないかと思います。インターネット上の情報を集めることと書籍から知見を得ていくことは、「テキストを読む」という共通点があるように見えて、別の技能として捉えるべきなのかもしれません。様々な基盤教育科目で読解スキルを高めるための活動を取り入れているものの、専門性の高い文献を自律的に理解できるレベルに達するには別の工夫が必要だということを示唆しているものと思います。

植田：「図書館の使い方」も要注目です。教員の回答をみると、この項目は授業ではあまり扱われていません。学生の回答を見ると、1～2年次で身についたとの実感度は低く、3年次になってやっと少しだけ値が上がっています。インターネットで手軽に情報収集ができるという近年の学生の行動が反映された結果と考えられます。その他、調査結果の詳細については、先行研究*で公開されていますので、是非ご一読ください。

難しさを克服するためにどのような工夫を行っていますか？

取材担当：調査で得られた知見を、実際の授業、あるいは、カリキュラムの整備などに応用することを考えていますか。

中岡：教員間の認識のすり合わせは重要だと思います。教養教育科目でも1年次から必修のものもあり、受講生がどの程度のアカデミックスキルを身につけているかが不確かな段階でも授業を進めていかなければなり

ません。すり合わせが重要になります。もちろん、自分の担当科目の活動の改善も必要で、初年次教育に資するための工夫を取り入れていこうとしているところです。例えば、「経済入門Ⅱ」では、アクティブラーニングを積極的に取り入れています。知識の教授だけにとどまらず、授業内の活動自体が大学生に求められる学習スキルの実践になるような工夫は必要だと思います。

植田 : 外国語教育科目においては、英語の授業の中で扱うのが狭い意味での語学スキルに留まらないように意識することが重要であろうとあらためて理解しました。発音、単語、文法などが重要ではないというわけではないですが、過度に焦点を合わせすぎると、「木を見て森を觀ず」になってしまいかねません。例えば、資料を収集しプレゼンに備えていくなどのアカデミックなプロセスで求められることも、英語の授業の中に取り入れていく必然性があると考えました。新カリキュラムの構想においてはこの点も念頭に置いています。

今後の展望

取材担当：今後、初年次教育に関する課題の科目横断的調査を継続する予定はありますか。

植田 : 早い時期に実施したいと考えています。今回の調査は、初年次教育の課題をどう探るべきかについても模索しながら行ったもので、予備調査的な面もありました。そのため、「学生が学習スキルを身につけているか」というリサーチクエスチョンについても、教員の感想を尋ねた段階でとどまっています。可能であれば、「身についた」との自己判断だけでなく、学生のスキルを測るための質問を加えるなどして、より実力を把握しやすい調べ方ができればと考えています。その成果を今後の国際環境工学部における初年次教育に応用していきたいですね。

※ 植田正暢，中岡深雪，池田隆介，柏木哲也，木山直毅，クレシーニ・アン，辻井洋行，筒井英一郎，プライア・ロジャー，村江史年．「科目横断的な初年次教育の実践とその課題」『第70回九州地区大学教育研究協議会論文文集』，pp. 35-42.



第5章

FD 委員会について

(1)活動概要

今年度、FD 委員会に設けられた 3 つのワーキング・グループ（以下、WG）の活動は以下の通りである。

研修 WG では、本学におけるアクティブラーニングの推進、事前事後学習の確保、教育アセスメントの実施を主な目的に掲げて、全学研修を 4 件実施した。①「春季新任教員 FD 研修」（対象：新任教員、4/7 開催）、②「夏季新任教員 FD 研修」（対象：新任教員、8/31 開催）、③第 1 回全学 FD 研修「ICT を利用したアクティブラーニングの実施」（対象：全教員・必修、遠隔オンデマンド方式にて 12/7～1/19 開催）、④第 2 回全学 FD 研修「大学教育における生成 AI 利用」（対象：北方教員必修・ひびきの教員任意、2/28 開催。なお、ひびきの教員に関しては、ひびきの全体 FD 研修として必修研修「ChatGPT 等生成 AI の活用と課題」が開催されている）の計 4 件の研修の企画・実施を行った。これらの研修の報告は以下のページに示す「研修報告」を参照されたい。

FD 活動広報 WG では、2025 年度よりスタートする新カリキュラムについての検討に資することをひとつの目的に、各学部・学群の入門科目（初年次教育）に焦点を当て、授業の位置づけや工夫について取材を行った。昨年度に引き続き、学内教員の FD のノウハウの更なる共有に加えて本学 FD 活動の学外への発信を意識し、「読み物」としての可視化・発信を意識した。関連して、FD 活動報告書の表紙および特集記事ではユニバーサルデザインフォント体を使用し、多くの人に読みやすい記事にすることを試みた。

授業評価 WG では、昨年度の授業評価アンケートの質問項目を元に、今年度も着実に授業評価を実施してきた。今年度からアンケートシステムが、Moodle から LCU に変更になり、アンケート結果の表示等が変更になった。自由回答欄や教員のリプライに関して、LCU では同時に表示することができず、システム外で対応した。このことに加え、以前の Moodle システムとの違いもあり、アンケートシステムに関して教員からの要望を受け、課題の整理を行った。今後、LCU のアンケート機能をカスタマイズするのか、新システムを導入するのか、検討を重ねる必要がある。

また、各部局単位で、それぞれ独自の方法によって授業のピアレビューが行われ、学期ごとに FD 委員会に報告書が提出された。

(2)活動一覧

<FD 委員会>

日程	回	内容
4 月 26 日 (Web 会議)	第 1 回	【議題】 1. 委員構成について 【報告】 1. 2023 年度春季新任教員研修実施報告 2. 2023 年度 FD 活動の推進予算配当結果について 3. 大学教育学会第 45 回大会について 【その他】 1. 2023 年度 FD 委員会開催予定
6 月 21 日 (Web 会議)	第 2 回	【議題】 1. 各 WG の進捗について 2. 2023 年度 1 学期授業評価アンケート実施について 【その他】 1. 1 学期ピアレビュー実施報告書作成について 2. 図書購入希望について
9 月 13 日 (Web 会議)	第 3 回	【議題】 1. 2024 年度 FD 活動の推進予算（案）について 2. 2023 年度 1 学期授業評価アンケート公開について 【報告】 1. 2023 年度夏季新任教員 FD 研修実施報告 2. 各 WG の進捗について 【その他】 1. 1 学期ピアレビュー実施報告書作成について（再掲） 2. 図書購入希望について（再掲）
10 月 18 日 (Web 会議)	第 4 回	【議題】 1. 2023 年度 2 学期授業評価アンケート実施について 2. 2023 年度全学 FD 研修実施について 【報告】 1. 各 WG の進捗について 2. 1 学期ピアレビュー実施報告 【その他】 1. 図書購入について

1 月 31 日 (Web 会議)	第 5 回	【議題】 1. 各 WG の進捗について 2. 2023 年度第 2 回全学 FD 研修実施について 【報告】 1. 2023 年度第 1 回全学 FD 研修実施報告 2. 2024 年度 FD アドバイザーについて 【その他】 1. 2 学期ピアレビュー報告書の提出について 2. 年間ピアレビュー報告書の提出について 3. 2023 年度 FD 活動報告書の提出について 4. 2024 年度 FD 活動計画書の提出について 5. 2024 年度全学 FD 研修企画提案書の提出について
3 月 14 日 (Web 会議)	第 6 回	【議題】 1. 各 WG の活動状況について 2. 2024 年度春季新任教員 FD 研修について 3. 2023 年度 FD 活動報告について 4. 2024 年度 FD 活動計画について 【報告】 1. 2023 年度第 2 回全学 FD 研修実施報告 2. 2 学期ピアレビュー実施報告

< 研修・講演会等 >

日程	項目	講師等
4 月 7 日	春季新任教員 FD 研修	上月 翔太 (FD アドバイザー)
8 月 31 日	夏季新任教員 FD 研修	上月 翔太 (FD アドバイザー)
12 月 7 日 ～ 1 月 19 日	第 1 回全学 FD 研修 (必修研修) 「ICT を利用したアクティブラーニングの実施」	8 ページ参照
2 月 28 日	第 2 回全学 FD 研修 「大学教育における生成 AI 利用」	10 ページ参照

(3)委員構成

2023年度のFD委員会は委員長1名、副委員長1名、委員16名、アドバイザー1名で構成される。

役 割	氏 名	所 属	職 名
委 員 長	後藤 宇生	経済学部経済学科	教 授
副 委 員 長	狭間 直樹	法学部政策科学科	教 授
委 員	寺田 真一郎	外国語学部英米学科	教 授
委 員	胡 玉華	外国語学部中国学科	教 授
委 員	李 東俊	外国語学部国際関係学科	准教授
委 員	魏 芳	経済学部経済学科	教 授
委 員	市原 勇一	経済学部経営情報学科	准教授
委 員	渡瀬 淳子	文学部比較文化学科・社会システム研究科	教 授
委 員	柴原 健太郎	文学部人間関係学科	准教授
委 員	和泉澤 千恵	法学部法律学科	准教授
委 員	黒石 啓太	法学部政策科学科	准教授
委 員	寺田 千栄子	基盤教育センター（地域創生学群）	准教授
委 員	孫 連明	国際環境工学部情報システム工学科	教 授
委 員	白石 靖幸	国際環境工学部建築デザイン学科	教 授
委 員	高木 駿	基盤教育センター	准教授
委 員	マーフィー ロバート	基盤教育センター	准教授
委 員	池田 隆介	基盤教育センター（ひびきの分室）	教 授
委 員	松田 憲	マネジメント研究科	教 授
アドバイザー	上月 翔太	FD アドバイザー	講 師

2023 年度 北九州市立大学 FD 活動報告書
2024 年 3 月発行

編集・発行 北九州市立大学 FD 委員会

〒802-8577

福岡県北九州市小倉南区北方四丁目 2 番 1 号